

【書評】

『江馬家來簡集』 江馬文書研究会編、思文閣出版、一九八四年、三一五頁、八、五〇〇円

齋藤信氏を代表とする江馬文書研究会は、昭和四七年以来、岐阜県大垣市の江馬家に遺る歴大な文書類を整理し、『江馬文書目録』を作成した。さらに、昭和五三年から、江馬家に遺る三四二通の書簡を解説して来た。本書は、そのうちの二二三通を活字化し、注を施したものである。付録として、江馬蘭齋、松齋、活堂、信成、賤男たちの年譜と江馬家略系図、江馬・江沢・宇田川家関係図が載せられている。

江馬家は、蘭齋（一七四七～一八三八）を始祖とする蘭学の家であり、その塾である好蘭堂を軸として、岐阜に蘭学を拡めた。松齋（一七七九～一八二〇）、活堂（一八〇六～九一）、信成（一八二六～七四）たちが続き、現在の当主庄次郎氏に至っている。本書は、蘭齋、松齋、活堂、信成、賤男（一八六二～一九二三）宛のもので、活堂宛の書簡を一番多く載せている。

本書巻頭には、杉田玄白、前野良沢、宇田川玄隨、嶺春泰、大槻玄沢、司馬江漢、小森玄良、藤林泰助、小石元瑞、吉雄常庵、宇田川榕菴、飯沼慾齋、山本亡羊、伊藤圭介、池内大学、緒方洪庵発信の書簡が写真版として載せられている。発信者は、蘭学者、医者、本草家、儒者などで、歴史上、有名な人物たちである。その幅広い交流は目を見はらせるものがある。

江馬家や岐阜蘭学に関しては、会員の青木一郎氏が数多くの著作として発表している。『岐阜県蘭学史話——江馬蘭学塾とその周

辺』（江馬文書研究会）、『大垣藩の洋医 江馬元齡』（同研究会）、『岐阜県近世医学史』（岐阜県医師会）、『岐阜県蘭学医学歴史散歩』（岐阜県医師会）、『大垣藩医 江馬蘭齋』（江馬蘭齋顕彰会）などである。これらの成果は、江馬文書に負うところ大である。

歴史研究においては、書簡は資料として、重要なものである。青木氏は『坪井信道詩文及書簡集』（岐阜県医師会）なるものを既に発表している。私にとって、この本の中の書簡のいくつかが大変役に立った。今回の来簡集も、多くの方々に役立つものと思われる。医史学、蘭学史ばかりでなく、歴史研究の幅広い分野に貢献するはずである。江馬文書の研究からは、門矜子氏の小説『江馬細香——化政期の女流詩人』（卯辰山文庫）を生んでいる。この研究会は、さらに、江馬細香来簡集をまとめる作業に入っているようである。

江馬文書研究会の会員で、本書作成に当たった方々は、前記の方以外に、青木允夫、岩崎鐵志、江馬庄次郎、遠藤正治、大脇良之、片桐一男、小池富雄、佐久間温巳、高木靖文、竹内幹彦、富安廣次、平野満、不破洋、松平昌夫、安井廣、渡辺公敏の諸氏で、日本医史学会の会員が多い。

最後に、江馬文書研究会と会員たちの活動は、会員でもある江馬家の当主御夫妻のお陰であることを附記させていただく。

（矢部 一郎）